2 月 8 日 メッセージ

聖書：マルコによる福音書 2 ： 1 - 11

「その人たちの信仰を見て」

大病を患った時こそ、人の本質が現れるといいます。写真家の幡野広志は 36 歳で多発性骨髄腫を発病、余命 3 年を宣告されます。以後、文筆活動や写真を通して社会と交流を続けています。作家の岸田奈美は幡野との対話を通して目から鱗が落ちたといいます。「家族が癌になってほしくないですか」との質問に、「『起こるかどうかわからないことにおびえるより、起こったあとにどうするかを、家族と考えたいよね。僕がこれからずっと、家族のことをサポートし続けられるわけじゃないから』不思議だ。人はだれしも、大切な人のそばにずっといられないかもしれないという意味を含む言葉なのに、深い愛が透けて見えた。」

中風を患った人がいました。もっとも、最近ではこの言葉を聞くことは少なくなってしまいました。辞書によれば「卒中の後遺症による、からだのまひ。中気」のこと。聖書協会共同訳では「体の麻痺した人」と訳されています。聖書の時代、病を患うことはすなわち、神から見放されていることを意味していました。だから、その人のことを見捨てたとしても、周囲はある意味仕方の無いことと受け止めていたはずです。

ところが、その人には友人がいました。しかも、四人も。この友人たちはなぜこの人を見捨てなかったのでしょう。それはきっと、体が不自由になってもなお、周囲への愛を忘れない人だったからではないでしょうか。「主が望まれるのは主を畏れる人／主の慈しみを待ち望む人」(詩編 147:11)でした。正しく神を畏れ、自らが置かれた状況を受け入れ、その上で、いつも感謝に溢れていた人でした。だから友人たちは高名なイエスがやってきたと聞いて、この病人を癒してほしいと願うまでになったのです。病人に近づけば穢れが移ると言われても臆することなく、神が救ってくださることを信じて行動することができたのです。

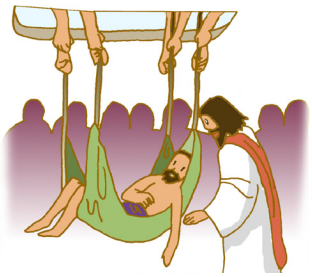
神の癒しは周囲の人々の真摯な祈りの中で実現します。例えば、やもめの息子が死んだと聞いたエリシャはすぐに家族の下に駆けつけ、「彼は中に入って戸を閉じ、二人だけになって主に祈った」(列王記下 4:33)。するとその祈りは聞かれて、「子供は七回くしゃみをして目を開いた」(列王記下 4:35)。

ヤコブの手紙もまた、「だから、主にいやしていただくために、罪を告白し合い、互いのために祈りなさい。正しい人の祈りは、大きな力があり、効果をもたらします」(ヤコブの手紙 5:16)と勧めています。

「イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、『子よ、あなたの罪は赦される』と言われた。」(マルコによる福音書 2:5)

イエスが目の当たりにされたのは、目の前にいる病人が真摯な信仰者であったというだけではありません。その人を連れてきた四人もまた、真摯に祈り、真剣に助けを求める一人ひとりであったという事実です。だからイエスは、「その人たちの信仰を見て」、罪の赦しを宣言されたのです。

もちろん、現代に生きる私たちは周囲が真摯に祈り、願ったにもかかわらず、思い通りの結果が得られないということも知っています。「変に期待させてはならない」と気を遣うこともあります。「そんなに簡単に治るんやったら、医者はいらんわ」とうそぶいて、諦めをごまかそうとすることもあります。それでも、信仰には力があることを忘れてほしくありません。それでも、祈りには力があることを忘れてほしくありません。

確かに、私たちの地上における交わりには必ず終わりがあります。けれども、それが永遠の別れではないこともまた、私たちは知っているはずではないですか。

そうであるならば、私たちは与えられている命の時間を真摯に祈ることに用いたいと願います。与えられた時間を精一杯、誰かの、そして自分自身のサポートをするために献げたいと願います。その「信仰を見て」、神が、イエスが応えてくださることをちょっとだけ期待しながら、今日も私たちは生きるのです。